

8 高病原性鳥インフルエンザの実践的防疫演習による地域の防疫対応能力向上への取組

東青地域県民局地域農林水産部青森家畜保健衛生所

○田中慎一 千葉和義
青木杏津沙 中島 聡
盛田淳三

はじめに

高病原性鳥インフルエンザの発生時には、発生農場の対応に加え、多岐にわたる作業の迅速な遂行が必要とされており、そのためには防疫対応を実施する構成機関が役割に応じ、主体的に対応する必要があります。

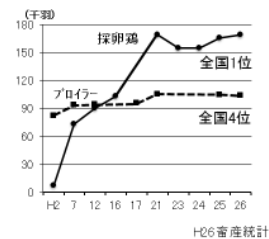
今回我々は、実践的な防疫演習を通じて地域の防疫対応能力向上に向けた取組を実施したのでその概要を報告する。

1 本県の養鶏産業

本県の養鶏産業は1戸当たりの飼養羽数では採卵鶏が全国第1位、ブロイラーでは第4位と全国有数の養鶏産業が盛んな県に位置づけられている。

飼養規模別構成比でも管内の38万羽規模を含む10万羽以上の農場が34%を占め、本病が発生した場合、大規模な防疫体制による迅速な対応が必要とされる状況下にある(図1)。

1戸当たりの飼養羽数の推移



飼養規模別構成比



図1 本県の養鶏産業

2 事前防疫対応

そのため県では事前の防疫対応として、「県高病原性鳥インフルエンザ等対策マニュアル」の制定、「トラック協会」や「高圧ガス協会」など関連業界との協定を締結してきた。

昨年度は、重点事業により防疫資材の備蓄強化や発生県の調査、大規模な県実動演習に加え、「高病原性鳥インフルエンザ発生時の県職員動員に係る基本方針」を改正し、発生農場の防疫作業とその受入対応の役割を分担するなど発生に備えた準備を進めてきた。

更に東青地域では平成26年4月に地域対策マニュアルを策定し、多様な業務の役割を明確化し、防疫対策の強化を進めてきた。

3 防疫対応能力の強化

これまで実施してきた対応を更に強化するためには、本県の養鶏産業の特徴を考慮し、大規模農場への対応として、多数の動員による大規模な防疫体制の構築、また、多様な業務への対応として、現地対策本部構成機関（以下構成機関）の主体的な対応が必要と考えられた。

そのためには、防疫演習は有効な手法であるが、より効果を上げるため、訓練者が「やらされてる感」ではなく「当事者意識」を持つこと、

更に「よりリアルな条件での実践的な演習」を防疫対応能力強化のポイントとして取り組むこととした。

4 実践的防疫演習

そこで今年度、実践的防疫演習として、始めに構成機関の主体性を引き出すため、特に防疫の主体となる地域農林水産部及び地域連携部の役割業務に応じ担当者を選出した。

また、担当者は実動及び机上演習を積極的に取り組むこととした。

その上で昨年度に引き続き企画・運営した県実動演習では、発生想定を東青地域とし、発生農場の作業員の受入対応を東青地域が担当することとし、更に昨年度のアンケート調査で示された演習課題へも対応することとした。

東青地域の机上演習では、演習課題を実動演習で訓練した内容に合わせて設定することで、実際の作業をイメージしながら演習課題を検討できるように計画した。

5 防疫実動演習

防疫実動演習は平成26年9月11日に青森市の大型イベントホールを集合施設に設定し、隣接する屋外広場に仮設農場を設置し実施した。

見学者は養鶏業者、市町村・農協、県等関係団体が173名、訓練者は発生農場作業として本庁職員47名（以下、本庁訓練者）、その受入れ対応は、東青地域現地対策本部構成員（以下、東青訓練者）が対応し、市町村・農協9名、県27名の合計36名で実施した。

また、演習項目は、「本庁訓練者の集合・バスでの集合施設への移動」、「東青訓練者による集合施設内への誘導、オリエンテーション」、「健康調査」、「防護服の着脱」、発生農場の作業として、「模擬鶏を使用した処分作業」と「生鶏を使用したケージからの取出し」とし、演習終了後、アンケート調査により演習内容の評価を実施した。

(1) 集合施設への誘導・オリエンテーション

本庁訓練者の集合施設到着後、東青訓練者が施設内へ誘導し、オリエンテーションとして、作業内容、スケジュールの説明を実施した（図2）。



図2□集合施設への誘導・オリエンテーション□

(2) 健康調査

健康調査は地域健康福祉部と青森市保健所が連携し実施した。

実施にあっては、案内係の配置や血圧計の使用説明や問診票の記載方法をパネル表示し、わかりやすいよう工夫した（図3）。



図3 健康調査

(3) 防護服の着脱

防護服の着脱では、東青訓練者が本庁訓練者を仮設テントへ誘導し、着脱の補助を実施した。

また、着脱では手順ごとに移動しながら、一つずつ着脱する「移動式方法」を試行し、更に補助者を手順ごとに配置し、パネルでも説明を表示することで人員を最小限にしつつ、わかりやすく且つ正しくできるよう工夫した（図4）。



図4 防護服の着脱

また、昨年度の課題であった、発生農場の訓練者への配慮として曇り止めゴーグルの使用や水分補給等の対応を行った。

(4) 発生農場作業訓練

発生農場の作業訓練は昨年同様、三段積み上げ式ケージを設置、農場を再現し実施した。

訓練内容は、模擬鶏を使用した「ケージからの取出し・運搬」、「炭酸ガス注入」、「箱詰め」の一連の処分作業と、生鶏を使用したケージからの取出し訓練を実施した（図5）。



図5 発生農場作業訓練

(5) 情報伝達の強化

更に新たな取組として、仮設テント内に情報基地としてホワイトボードやパソコンを設置し、発生農場とのトランシーバーや画像送信による情報共有についても訓練を実施した（図6）。



図6 情報伝達の強化

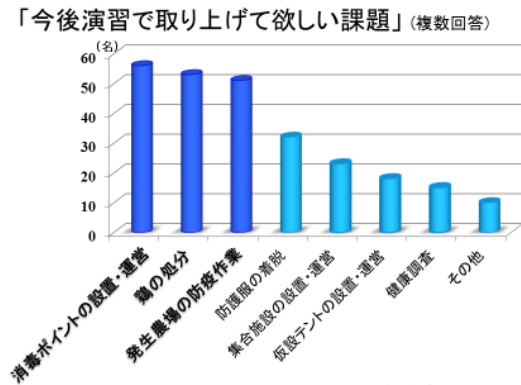


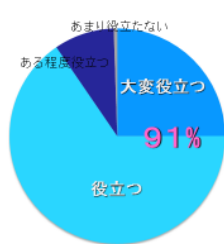
図8 アンケート調査結果2

(5) アンケート調査

演習後実施したアンケート調査の回収率は見学者 56.6%、訓練者 90.4%であり、見学者及び訓練者を対象とした「発生時の対応として演習は有効か？」の質問に対しては、91%から大変役立つ、役に立つ、との回答が得られた。

また、主な意見として、健康調査及び防護服着脱方法の改善や情報伝達について好評価が得られた(図7)。

「防疫演習の有効性」



主な意見

- ・健康調査の手順がスムーズになった(養鶏業者)
- ・防護服の着脱がわかりやすく、確実性が向上したと思う(団体職員)
- ・トランシーバーでの情報伝達、画像での状況把握は有効(養鶏業者)

図7 アンケート調査結果1

また、「今後取り上げて欲しい課題」については、「消毒ポイントの作業」や「鶏の処分など発生農場作業」についての要望が多く上げられた(図8)。

6 机上演習

机上演習は平成26年10月29日に当所研修室で現地対策本部構成員の他、畜産課を加えた47名で実施した。

(1) 実施方法

演習は、地域農林水産部及び連携部が中心となり、演習課題を関係公署と検討するシナリオなしのロールプレイング方式により実施した。

演習場面は、情報連絡会議終了後から病性決定までの間で、防疫作業の準備や計画を作成する時間とした。

実施にあっては、各プレイヤーは実際の場面を想定し、公署毎に配置し、通常電話等で行う関係公署との連絡は、連絡カードのやり取りにより進行した。

検討した結果は随時、ホワイトボードへ記載し、最後に演習課題への対応内容について担当者が発表し、情報共有を図った。

(2) 演習課題

演習課題は、地域マニュアルに則した、各公署の分担業務に応じた内容とした。

また、演習課題を実動演習で訓練した内容と関連付けたものとする事で、実際の対応をイメージしながら検討できるよう設定した(表1)。

表1 演習課題

演習課題	実動演習訓練事項	担当部署(所属)
現地対策本部の設置		・地域農林水産部 ・農業普及振興室生産班 ・地域連携部
本庁職員等の受入れ	本庁訓練者の集合、移動	・地域農林水産部指導調整課
集合施設の設置 健康調査	集合施設でのオリエンテーション、 健康調査	・地域農林水産部 ・農業普及振興室企画班
仮設テントの設置	仮設テントでの防護服着脱	・地域農林水産部 ・農業普及振興室担い手班
消毒ポイントの設定		・地域農林水産部 ・農業普及振興室生産班

7 成果

以上の結果、実動演習では、「発生農場の防疫作業」と「その作業員受入れ」の防疫作業全体像を初めて体験、訓練する事ができた。

また、健康調査や防護服の着脱におけるわかりやすさ、発生農場作業員への配慮など昨年度の課題へも対応し、更に情報伝達の強化などの詳細なデータを蓄積することができた。

アンケート調査では、実動演習の必要性が再認識され、より具体的な想定による演習継続の必要性も確認された。

更に担当者を選定し積極的に実動及び机上演習を体験、訓練したことが主体性や当事者意識へとつながりその後の対応へと発展した。

机上演習後の担当者検討会では、演習の結果を検証し、詳細や役割分担等が検討された。

また、消毒ポイントの現地調査においても、警察署、市町村を交え、設置場所の確認や冬期間の対応について検討が行われた(図9)。



図9 担当者検討会及び消毒ポイント現地調査

8 まとめ

本県の高病原性鳥インフルエンザの防疫にあっては、大規模な防疫体制による対応が必要であり、そのためには作業に不慣れな職員を多数動員せざるを得ない状況下にある。

更に、多岐にわたる業務を同時に進めていくためには、構成機関が当事者意識を持って主体的に行動することが必要である。

そのためには、今回取組んだ発生時の作業をリアルに再現・体験する実動演習とそれらをイメージしながら自分で考え、対応する机上演習を組み合わせた実践的防疫演習が有効と考えられた。

今後、更に防疫対応能力のレベルアップを図り、家畜防疫体制を更に強化していくためには、得られた課題を整理し、より実践的な演習を繰り返すことが必要と考える。